

<今回>282回目 2020年9月25日(金)15時~18時 601号室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p200(4)「分国論」と倭の五王 より

<前回>281回目(20-9-11) 出席者 10名

資料(20-09-11-1)前回のまとめ(清水)

-2) 伝承の重要性(こうやの宮の人形)(清水)

-3) 七支刀2回目報告、神功紀における百済との交渉者(高山)

-4) 中国史の倭国の名称と音の表記の変遷(大墨)

A 報告 11日午前10時から「多元の会」の藤田隆一氏の呼びかけで、Skypeソフトでビデオ相互会議の実験が呼びかけられた。6名の参加者がいて何とか出来たので、毎週金曜日10時から続けてみることになった。八王子セミナーでは大墨氏がzoomソフトで行う方針だ。コロナ禍いろいろ工夫して生涯学習を続けよう。

前回同様、前回のまとめから、はじめた。七支刀については古事記と日本書紀は似ているようで同じではない。七支刀は日本書紀成立時点では石上神宮にあったという記録はないし、実際なかった。(前回読書分)

B資料 3) 高山氏の2回目の報告、①日本書紀神功紀における百済との交渉者を整理した。神功39年から倭国の交渉者は、366年斯摩宿禰(卓淳国)。367年から6回千熊長彦が交渉者として登場。百済記に職麻那那加比跨といえるは蓋し是か(職をチクと2音に読んでいる)。古事記では応神記に阿知吉師の名と千字文伝来の記事があるのが不審という。(千字文はまだできていないのに繰り返してはめ込んだ証拠という)

② 斯摩は志摩ではないか。何の姓か知らずとある。職麻那那加比跨は千熊長彦と同一人物ではないか。百済記と日本旧記に別々の名前でも伝わっていたと仮定する。熊についても調べている。筑紫志摩(チクシマ)をチクマと詰まらせて呼んだのか。古代文献(記紀、万葉集、風土記など)は筑紫をツクシと振り仮名がついている。

③ 筑紫史益は持統天皇に29年に渡る奉公で大表彰された。白村江敗戦の年から九州王朝史料(日本旧記)を日本書紀の編さんに役立てるため、九州王朝の事績を隠して引用する作業を行わせた。しかし史料編集者としての良心と誇りは史記の司馬遷と同様持っていたとみたい。(日本旧記の名を雄略紀に一度だけ引用)

④ 結論として、筑紫志摩宿禰長彦は筑紫を姓とする九州王朝の重鎮で、怡土志摩地方の豪族で半島とも深い関係があり、神功紀52年に「百済人久氏ら、千熊長彦に従い七支刀・七子鏡等献る」と書かれていることから、九州倭王の元に献上されたと考える。

-4) 大墨氏より、「中国史書の倭国の国名とその音の表記の変遷」について「八王子セミナー」での発表予定の資料が説明された。邪馬壹国、邪馬臺国の表記と発音について、すべての資料を三國志、後漢書、晋書、隋書、北史南史、翰苑、太平御覧、など刊行年代、国名、その音、引用資料と誤字と思われるものもすべて拾い出して掲載した。誤字と思われるものは継続性がないことから判断される。(例えば翰苑の邪馬嘉国など)びっくりしたのは臺の文字にイ音、惟、維の音文字。当然、タイ音、堆、推もある。大墨氏の論は精緻である。臺にイ音があるのは初めて知った。古田先生はこの論はご存じなのか。邪馬一国はイチではなく、イツと後半の音を飲み込む。だからヤマイ国である。このイはキである。怡土国は何故か金印の委奴国論争から消えた。

-2) こうやの宮の人形の一つに七支刀を持つ人形がある。これが世に出たきっかけに携われたので、その経緯を記録した。2002年保管されていた小屋の取り壊しの際、地元有志で祠を作り、祀ったもの。(5年経過)

C 読書 時間が無く、初めて読み合せを無くした。第1回2008年8月25日以来初だ。中止も2020・2・28から、6・8まで7回中止、6・26、第276回として再開した。(月2回ペース)

次回日程 2020-10-9(金) 15時から18時 601会議室